乳幼児のアナフィラキシーへの対応

食物アレルギーのこどもや、過去に食物アレルギーの診断・治療を受けたことのあるこどもはリスクが高いです。食後に運動したり、暴れたりなど、激しく体を動かした場合、睡眠不足や風邪薬（解熱鎮痛剤）などを服用していた場合、許容量以下の食物アレルゲンを摂取した場合でも、アナフィラキシーを起こすことがあります。

こどもでは、食物以外の原因によるアナフィラキシーは非常に少ないですが、たくさんの原因があり、その全てに注意することは不可能です。
ワクチンのアナフィラキシーはまれですが、副反応と思われる症状を訴える人は少なくありません。最近はペットを飼う家庭が増えているせいか、動物アレルギーを発症したこどもが、その動物に接触したり近づいてアレルゲンを吸い込んだりしたときに、アナフィラキシーを起こすことがあります。

軽い症状に気付いたら、こどもを決して一人にせず、複数の大人を呼び、エピペンの介助や119番通報をする準備をしましょう。

食後 服薬後 ワクチン接種後 動物接触後 ハチや虫刺されの後 の症状出現に注意

心停止・呼吸停止

軽い症状

消化器症状	呼吸器症状	皮膚症状
▪吐き気 ▪軽い腹痛 ▪嘔吐（おうと）1回 ▪下痢1回	▪口やのどのかゆみや違和感 ▪鼻水・くしゃみ ▪軽い数回のせき	▪かゆみ ▪数個のじんましん ▪部分的な赤み ▪唇の腫れ ▪まぶたの腫れ



軽い症状なら5分ごとに観察し、医療機関の受診やエピペンを準備

全身性のじんましんや強いかゆみ、唇・舌や顔全体の腫れが急に出現

下記の症状が出現

重い症状

消化器症状	呼吸器 症状	全身（循環器）症状
▪繰り返し吐き続ける ▪持続する我慢できないほど強い腹痛	▪のどや胸が 締め付けられる ▪声がかすれ る ▪犬が吠える ようなせき ▪持続する強 いせき込み ▪ゼイゼイ、ヒュー ヒューする呼吸 ▪息がしにくい	▪唇や爪が青白い ▪脈を触れにくい・不規則 ▪意識がもうろうとしている ▪ぐったりしている ▪尿や便を漏らす



直ちに医療機関を受診

▪小児科 ▪救急科



p.02「心停止の救命処置」を参照





体重が15kg未満の食物アレルギーのこどもはエピペンを処方されていないことが多いです。アナフィラキシーを疑ったら、エピペン所持の有無に関わらず、直ちに医療機関の受診を検討し、エピペン所持者はエピペン使用を考慮します。

食物アレルギーとぜん息を合併したこどもは、特にリスクが高いです。

エピペン®（アドレナリン自己注射薬）が 処方されていて、アナフィラキシーショックを疑う場合、上記の重い症状が一つでも あればエピペンを太ももに打ち、119番通報

衣服の上から打つことができます。



- 食物アレルギーのこどもがエピペンを処方されていたら、すぐ使えるところに保管しておきましょう。
- エピペンの有効期限は1年余りです。毎年忘れずに、主治医に新しいエピペンを処方してもらいましょう。

エピペンは

- 普段から、練習器を使って太ももに打つ訓練をしておくことが必要です。
- こども自身が打てない場合は、介助が必要になります。暴れるこどもの押さえ方やエピペンの打ち方を訓練しておくことが大切です。